

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：12501
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2020～2022
 課題番号：20K02508
 研究課題名(和文) 1930～40年代日本における中国人留学生教育 「相互理解」と「軋轢」の史的考察

研究課題名(英文) Education of Chinese Students in Japan in the 1930s and 1940s: A Historical Study of Mutual Understanding and Conflict

研究代表者
 見城 悌治 (KENJO, TEIJI)

千葉大学・大学院国際学術研究院・教授

研究者番号：10282493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本で学んでいた中国人留学生の研究は、近年盛んになりつつある。ただし、その多くは、清末民初の比較的「友好的」であった時期を扱うものであり、満州事変以降、敗戦に至るまで、両国が不和になった時期の研究は十分とは言えない。

そうしたなか、申請者は、1930年代以降、中国留学生全般を支援する「日華学会」(1918年創設)と医学薬学留学生の支援を行なった「同仁会」(1902年創設)に焦点を当て、それぞれの教育や支援の様相を明らかにした。また帰国した元留学生後との関係性についても調査した。その結果、戦時下故の「問題」はあったものの、「交流」や「相互理解」のための試みがなされたことを明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

満州事変以降において、日本が中国留学生たちにどのような教育を与え、また留学生が母国でそれをどのように活かそうとしたのかについての研究は、これまできわめて少なかった。

そうしたなか、本来的には中国留学生支援を目的に作られた団体の「日華学会」と「同仁会」に焦点を当てることにより、中国留学生との軋轢と融和を明らかにすることができた。もちろん両団体は、国策に従わざるを得ない面は多々あった。

しかし、戦時下に、諸団体自身が煩悶しながらも、留学生との「関係性」を繋ごうとした営為は、困難な時代における教育関係者の対処として、その是非を含め、今後も丁寧な分析を深めていく必要性を認識できた。

研究成果の概要(英文)：Research by Chinese students studying in modern Japan has been gaining momentum in recent years. However, much of it dealt with the relatively "friendly" period of the late nineteenth and early twentieth centuries. Moreover, research on the period after the Manchurian Incident when the two countries were at odds cannot be said to be sufficient.

Under these circumstances, the applicant focused on the 'Nichika Gakkai' (founded in 1918), which provided general support to Chinese students, and the 'Dojinkai' (established in 1902), which supported medical and pharmacy students from China. I was able to clarify what kind of education and support each organization provided. I also investigated the relationship with former Chinese students who returned to their home countries.

As a result, although there were "problems" due to the wartime situation, I was able to clarify that attempts were made for "exchange" and "mutual understanding."

研究分野：日本近代史

キーワード：留学生教育 近代日中関係 交流 相互理解 軋轢

1. 研究開始当初の背景

近代日本に留学していた中国人学生の研究は、21世紀を迎え、留学生受け入れ30万人計画やグローバル化が呼号される国内外の事情の後押しもあり、盛んになっている。

そうしたなか、改めて戦後の中国人留学生史研究を顧みると、その主流は、日露戦後に急増した留学生に対する諸教育の実際や、またそれを多方面から享受した留学生たちが辛亥革命やその後の政治や社会にどう関わったのかに着目する傾向が強かった。言い換えれば、日本側が「近代知」にかかる学問領域を積極的に教授し、それを中国の若者が積極的に摂取し、近代中国に有益な働きをしたという Win - Win の「交流」活動であった点を重視する研究であった(もちろん孕まれた問題点の指摘もなされていたが)。

その一方で、1931年の柳条湖事件に端を発する「満州事変」、また翌年の「満洲国」建国、さらに1937年の盧溝橋事件以降の日中戦争期に、日本で学び続けていた中国留学生についての検討は積極的に行われてはこなかった。日本にとっては直視しにくい事案であり、また中国側からすれば、戦争勝利以降、当時の留日学生や「親日派」が「漢奸」と見なされる傾向が少なからずあったことから、両国の「交流」を阻害する負の歴史であると見なされたためと考えられる。

2. 研究の目的

筆者は、1930年代から40年代にかけて、日中関係が不安定であった時期の中国留学生の様態や帰国後の活動を分析することが、中国留学生と日本社会との「交流」や「相互理解」、さらには「軋轢」を正面から見据えることこそが、今日まで続く両国の「不全さ」を解消するための糸口を探る重要な課題と考え、それを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

近代日本への留学生をめぐる一次史料(文献)である『日華学報』や『同仁』を縦横に用いた研究は不十分であったため、それらの雑誌や周辺史料を精査する文献研究を行なった。

4. 研究成果

助成を受けた3年間に発表した研究の概要を紹介したい。ここでは8つの研究概要を示すが、中国医薬留学生あるいは中国本国への医薬支援を行った「同仁会(1902年創設)」および留日中国留学生の教育や経済支援をおこなっていた「日華学会(1918年創設)」の役割に焦点を当てた内容となった。二つとも、中国留学生と直接接した団体であり、かつ留学生の在籍校の教員も関わる場合が多く、「相互理解」と「軋轢」を考察するのに適切と考えたためである。

「同仁会による留日医薬留学生への支援」(孫安石・大里浩秋編著『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』東方書店、225~252頁、2022年3月)は、同会が1927年から始めた「留学生懇話会」などの分析を通じ、同仁会による中国留学生支援を考察した。

「日中戦争開戦前後における日本医学界の中国・中国留学生観 医薬支援団体「同仁会」の機関誌に見える言説から」(『人文学報(千葉大学)』51号、13~35頁、2022年3月)は、1937年7月の盧溝橋事件を前後する時期に、同仁会が、中国や中国留学生に対し、どのような認識を示していたのかをまとめた。

「近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動 「中華民国医界名士録」を素材として」(『人文研究(千葉大学)』50号、207~234頁、2021年3月)は、1929年から翌年にかけて、同仁会発行の中国語版雑誌『同仁会医学雑誌』に掲載されていた中華民国の代表的医師とされた人々の紹介記事から、その特色を明らかにした。

「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴 - 日本留学者を中心に」(『千葉大学国際教養学研究』5号、1~32頁、2021年3月)は、1935年に同仁会が、中国語で発刊した『中華民国医事綜覧』に掲載されていた中国人医師4773名のうち、海外留学経験者が775名、うち日本留学者が500名であったことを確認した。また、その500名が在籍した医学校名や全体の特質を明らかにした。

「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴(2) 欧米留学者を中心に」(『千葉大学国際教養学研究』6号、27~54頁、2022年3月)は、775名のうち、日本留学者を除く275名の留学先(国や大学)の特質を明らかにした。

「『日華学報』誌から見る満州事変前後の中国人留日学生をめぐる動向」(『千葉大学国際教養学研究』7号、57~76頁、2023年3月)は、1931年9月に勃発した満州事変を前後する時期に、日華学会発行の『日華学報』が、留学生たちにどのように対処しようとしたのか、留学生はどのような本音を漏らしていたのかを明らかにした。

「戦前期の留学生政策における日華学会と国際学友会の役割」(『アジア教育』14巻、46～59頁、2020年11月)は、佐藤由利子氏との共著である。「日華学会」について見城が、その概要や歴史的意義を論じ、一方、中国人以外の留学生の支援をしていた「国際学友会」の叙述を佐藤氏が行ったものである。

「日中戦時下における『華文大阪毎日』誌の中国人向け帝国大学情報」(見城編『近代東アジアにおける国家と個人』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 第376集、97～120頁、2023年2月)は、大阪毎日新聞社が1938年11月に創刊した中国語雑誌『華文毎日』が、日本の帝国大学を中国語で紹介する記事を分析し、中国側に何を発信しようとしたのかを明らかにした。

以上、これらの研究により、これまで研究が手薄であった1930年代から40年代にかけての、両国の「相互理解」と「軋轢」の一端が明確になったと考えている。

なお、筆者は、科研期間であった2020～2022年度に、上記以外の留学生史関連の論考として、以下も発表していることも補足しておきたい。

- 1) 「偽満州国留日学生会的活動」徐志民・孫安石・大里浩秋編『団体与日常 - 近代中国留日学生的生活史』社会科学文献出版社(中国・北京)、285～318頁、2022年8月(「満州国留日学生会」の諸活動とその実相」孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、217～257頁、2019年3月、の中国語訳)。
- 2) 書評「周一川著『近代中国人日本留学の社会史』」『中国研究月報』886号、pp14～17、2021年12月号。
- 3) 書評「武藤秀太郎著『大正デモクラットの精神史 - 東アジアにおける「知識人」の誕生』」『日本経済思想史研究』22号、pp74～76、2022年3月。
- 4) 書評「鄭鐘賢(渡辺直紀訳)『帝国大学の朝鮮人 大韓民国エリートの起源』」『アジア教育』16巻、93～97頁、2022年11月。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 見城 悌治	4. 巻 51
2. 論文標題 日中戦争開戦前後における日本医学界の中国・中国留学生観：医薬支援団体「同仁会」の機関誌に見える言説から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学人文研究 = The Journal of humanities	6. 最初と最後の頁 13～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S03862097-51-P13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 見城悌治	4. 巻 6
2. 論文標題 『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴(2)：欧米留学者を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学国際教養学研究	6. 最初と最後の頁 27～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S24326291-6-P27	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 見城悌治	4. 巻 74 - 12
2. 論文標題 書評 周一川著 東信堂『近代中国人日本留学の社会史：昭和前期を中心に』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 14～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤 由利子、見城 悌治	4. 巻 14
2. 論文標題 戦前期の留学生政策における日華学会と国際学友会の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア教育	6. 最初と最後の頁 46～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32302/ajiakyouiku.14.0_46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 見城悌治	4. 巻 50
2. 論文標題 近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動 「中华民国医界名士録」を素材として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文研究(千葉大学)	6. 最初と最後の頁 207 - 234
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S03862097-50-P207	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 見城悌治	4. 巻 5
2. 論文標題 『中华民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留學歴 - 日本留學者を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 千葉大学国際教養学研究	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S24326291-5-P1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 見城悌治	4. 巻 7
2. 論文標題 『日華学報』誌から見る満州事変前後の中国人留日学生をめぐる動向	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学国際教養学研究	6. 最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S24326291-7-P57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 見城悌治	4. 巻 376
2. 論文標題 日中戦時下における『華文大阪毎日』誌の中国人向け帝国大学情報	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 97-120
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 見城悌治
2. 発表標題 同仁会による留日医薬留学生支援
3. 学会等名 中国人留学生研究会 第86回例会、Zoom会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 見城悌治
2. 発表標題 渋沢栄一の中国留学生支援
3. 学会等名 2021年度駿台史学会大会、Zoom会議（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 見城悌治
2. 発表標題 同仁会による医薬留学生支援
3. 学会等名 中国人留学生研究会 第92回例会、Zoom会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 見城悌治、佐藤由利子
2. 発表標題 戦前期の留学生政策の変化 日華学会と国際学友会の活動分析から
3. 学会等名 2020年度定例研究会、Zoom会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 見城悌治
2. 発表標題 書評「周一川『近代中国人日本留学の社会史』を読む」
3. 学会等名 中国人留学生史研究会第74回例会、Zoom会議
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 孫安石, 大里浩秋 編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東方書店	5. 総ページ数 500
3. 書名 明治から昭和の中国人日本留学の諸相	

1. 著者名 徐志民・孫安石・大里浩秋編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 社会科学文献出版社(中国・北京)	5. 総ページ数 350
3. 書名 団体与日常 - 近代中国留日学生的生活史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------